

① 申請者	◎長崎県 (対馬市、壱岐市、 五島市、新上五島町)	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～			
④ ストーリーの概要(200字程度)			
<p>日本本土と大陸の間に位置することから、長崎県の島は、古代よりこれらを結ぶ海上交通の要衝であり、交易・交流の拠点であった。</p> <p>特に朝鮮との関わりは深く、壱岐は弥生時代、海上交易で王都を築き、対馬は中世以降、朝鮮との貿易と外交実務を独占し、中継貿易の拠点や迎賓地として栄えた。</p> <p>その後、中継地の役割は希薄になったが、古代住居跡や城跡、庭園等は当時の興隆を物語り、焼酎や麺類等の特産品、民俗行事等にも交流の痕跡が窺える。</p> <p>国境の島ならではの融和と衝突を繰り返しながらも、連綿と交流が続くこれらの島は、国と国、民と民の深い絆が感じられる稀有な地域である。</p>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	長崎県文化観光物産局文化振興課文化施設振興班 中尾 智美		
電 話	(095) 895-2762	FAX	(095) 829-2336
E-mail	nakao-tomomi@pref.nagasaki.lg.jp		
住 所	〒850-8570 長崎県長崎市江戸町2-13		

市町村の位置図（地図等）



※国土地理院の電子地形図に市町名等を追記して掲載

【対馬市】

韓国・釜山から 49.5km に位置し、南北 82km、東西 18km の細長い島。島の 89% が山林で、中央部にリアス式海岸の浅茅湾を有する。島内を国道 382 号が縦断し、長崎とは空路、壱岐とは海路、福岡とは空路と海路、釜山とも海路で結ばれている。

【壱岐市】

九州本土と対馬の間に位置し、南北 17km、東西 15km の丘陵性で平坦な壱岐島の周囲に、小離島が点在する。壱岐島内を国道 382 号が走り、長崎とは空路、対馬・福岡・佐賀とは海路で結ばれている。

【五島市】

長崎港から西へ約 100 km、五島列島の南西部、九州の最西端に位置し、福江島の周囲に 10 の有人島と 52 の無人島がある。複雑な海岸線を有する福江島内をほぼ一周するように、国道 384 号が走り、長崎・福岡とは空路と海路で結ばれている。

【新上五島町】

五島列島の北部に位置し、中通島・若松島を主な町域とし、その周辺に 5 の有人島と 60 の無人島がある。中通島と若松島間、中通島と頭ヶ島間は橋が整備され、中通島内の奈良尾港から有川港までを国道 384 号が縦断し、長崎・佐世保・福岡とは海路で結ばれている。

構成文化財の位置図（地図等）

【対馬市】





※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

【 壱岐市 】



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

【五島市・新上五島町】



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

(2) 遣唐使史跡 (3) 最澄ゆかりの山王信仰



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

ストーリー

日本は大小 6,852 の島から成り、長崎県には日本最多の 971 の島がある。朝鮮半島との間に飛び石のように浮かぶ壱岐と対馬、大陸との間の東シナ海に鎖状に浮かぶ五島列島は、いにしえより、日本と大陸を結ぶ「海の道」の要衝であり、大陸との交流のインターフェースでもあった。

とりわけ、朝鮮半島と指呼の間にある国境の島、壱岐と対馬は、その最前線であった。

邪馬台国へと続く「海の道」に浮かぶ国際交流の都

日本がまだ「倭」の国とよばれていた時代、中国の使節は、朝鮮半島から対馬、壱岐を經由して、倭の国の女王がいる邪馬台国を目指した。対馬、壱岐を旅した中国の使節の足跡を辿るとき、『魏志倭人伝』に記されたとおりの原風景が目の前に広がる。

中国の使節が訪れた「^{い き こ く}一支出国」の「原の辻」は、海上交易で王都を築いた国際交流都市の先駆けであった。倭の国のどこよりも早く海外の情報をキャッチできる原の辻には、日本人だけでなく、朝鮮半島から移り住んだ人もいて、活気に満ちあふれていた。

朝鮮半島系土器、ムンクの『叫び』のような人面石など多様な遺物が出土しているこの地は、まさに弥生時代のデパートであった。なかでも、きらきらと青色に輝く中国製トンボ玉は、女性や子どもたちの心を捉えたに違いない。

県内有数の穀倉地帯でもある遺跡の周辺は、古代米が栽培されており、復元された遺跡と青田や稲穂が広がる眺めは、訪れた人を弥生時代へタイムスリップさせてくれる。



原の辻遺跡

朝鮮半島との関係に左右される日本最果ての島

最先端の文化の導入と交流が行われる一方、国境の島は異国へとつながる海の道の最終中継地、国防の最前線としての顔を持つ。

壱岐は、大和政権が朝鮮半島へ進出する際の^{へいたん}兵站基地としての役割を担っていた。壱岐古墳群は、当時としては日本有数の墳丘・石室の規模を誇っており、ひんやりと涼しい石室の中に身を置くと、古墳に眠った人物の権勢が静かに伝わってくる。

663 年、白村江の戦い以降、日本と新羅との外交関係が悪化すると、遣唐使は、壱岐、対馬を経て中国に渡るルートから、五島列島を経て東シナ海を渡る危険なルートをとらざるをえなくなった。

当時の船の構造、航海技術では、ほとんど無事には帰ってこられなかった時代、万葉の都人にとって五島は、日本の最果ての地であり、亡くなった人に会える「みみらくのしま」と称された。

千年以上も昔と変わらぬ東シナ海的大海原を目の前にすると、この地を最後に異国へと旅だった人々と送り出す家族の覚悟や想い、空海の「辞本涯」(本涯 = 日本の果て)の言葉が、時代を超えてこだまする。



金田城跡の山頂から国境の海を望む

一方、壱岐と対馬でも、白村江の戦い後、国防のために^{さきもり}防人と^{とび}烽火が置かれ、対馬には亡命百済

人の技術による朝鮮式の山城「金田城」^{かねだじょう}も築かれた。

複雑に入り込んだ海岸に囲まれた浅芽湾^{あそつわん}と天然の絶壁を利用して築かれた金田城跡に立ち、国境の海を見下ろすと、はるか東国から送られてきた防人たちの望郷の念に胸がつまる。

国交断絶から復活へ ～朝鮮通信使がつないだ日朝交流の架け橋～



朝鮮通信使行列の再現

室町時代の対馬は、島主・宗氏^{もうちう}を中心に日本と朝鮮との間で外交の実務と貿易を独占してきたが、豊臣秀吉の朝鮮出兵により一変し、国交は断絶した。

長年、朝鮮との貿易に島の経済を頼ってきた対馬にとって、朝鮮との国交回復、貿易復活は死活問題であった。

対馬藩は、朝鮮との国交回復交渉を行い、その間、日朝双方の国書を偽造するなど危ない橋を渡りながら、ようやく江戸時代最初の朝鮮通信使来日に成功する。

その後、朝鮮貿易の復活も果たし、対馬藩の繁栄^{はんしやういん}ぶりは万松院に古色蒼然と並ぶ歴代対馬藩主墓所の中でも、ひときわ目を引く当時の藩主の墓所の巨大さからも偲ばれる。

以来、約 200 年に渡り、合計 12 回の日朝修好の象徴である朝鮮通信使の来日が続いた。

朝鮮通信使を丁重に出迎えるため、立派な庭園を持つ金石城^{かねいし}を整備した対馬藩。異国の華やかな衣装をまとった行列は、遠方からも見に来る人も多く、沿道に並ぶ人々を魅了した。

隣国同士が 200 年以上の長きに渡り、平和的関係を築いたことは世界史的にみても稀有なことがある。時に反目し合うこともあったが、日朝関係の根底には「誠信の交わり」があった。

享保の通信使の江戸往復道中、対馬藩の儒者・雨森芳洲^{あめのもりほうしゅう}と通信使の製述官・申維翰^{しんいかん}は互いの主張を譲らず衝突してきたが、旅の終わりには涙を流して別れを惜しんだ。

「互いに欺かず、争わず、真実をもって交わる」の精神は、今日の国際交流にも通じる。

時代とともに、壱岐と対馬の中継地としての役割は希薄になっていったが、島の特産品や民俗行事には、交流の痕跡が残っている。

壱岐の特産品「壱岐焼酎」は、大陸から伝わったとされる蒸留法を取り入れ、今では世界に誇れる産地ブランドとなっており、対馬の「対州そば」は大陸から伝わったそばの原種に近い。

また、稲作伝来の地といわれている対馬の豆酏^{つ づ}地区は、宮中祭祀「新嘗祭」^{にいなめさい}にも奉納したことがある古代米の一種、赤米を神田で栽培し、その赤米を御神体とする神事が行われており、亀の甲を焼いて吉凶をみる古代の占い「亀卜」^{きぼく}もこの地区で受け継がれている。

民間では、朝鮮通信使行列の再現をはじめ、音楽祭、国境マラソンなど様々な日韓交流イベントが行われている。対馬高校ではハングルや韓国文化を学ぶコースが設置され、壱岐高校においても、原の辻遺跡を学び、中国語・中国文化を学ぶコースがあり、未来の日本を担う高校生が国際交流の基礎を習得している。

国境の島であるために融和と衝突の最前線の歴史を刻んできたが、今もなお連綿と交流が続くこれらの島は、国と国、民と民の深い絆が感じられる稀有な地域である。

ストーリーの構成文化財一覧表

《対馬市》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	かねだじょうあと 金田城跡	国特別史跡	唐や新羅の日本進攻を防ぐ目的で築かれた朝鮮式山城跡。山深い城山の頂からは、1300 年以上前に防人が見つめていた国境の海が一望できる。	対馬市
2	つしま きぼくしゅうぞく 対馬の亀卜習俗	国選択 無形民俗	亀の甲を焼き、ひび割れで年の吉凶を占う。大陸から朝鮮半島を経て伝わったといわれ、古くは壱岐や伊豆でも行われていたが、今では対馬のみで傳承されている。現在、亀卜は旧暦 1 月 3 日のサンゾーロー祭(市無形)で行われている。	対馬市
3	つ つ あかごめぎょうじ 豆酥の赤米行事	国選択 無形民俗	豆酥地区は、大陸から稲作が伝わった地といわれており、古くから、赤米を祀り、栽培する行事が行われている。	対馬市
4	つしまはんしゅうそうけぼしよ 対馬藩主宗家墓所	国史跡	江戸時代、朝鮮半島との外交・貿易の実務を担った対馬藩宗家の菩提寺「万松院」として市民に親しまれ、百雁木(ひゃくがんぎ)と呼ばれる 132 段の石段や杉が立ち並び、壮大な墓地と墓石が、朝鮮貿易の興隆を反映している。	対馬市
5	ばんしょういん みつぐそく 万松院の三具足	市有形	朝鮮との緊密さがわかる朝鮮国から贈られた青銅製の祭礼用三具足(香炉、燭台、花瓶)で、万松院の本堂にある。	対馬市
6	どうぞうによらいざぞう 銅造如来坐像 くろせかんのんどう (黒瀬観音堂)	国重文	統一新羅時代(8 世紀)のもので、朝鮮半島経由で伝わったとされる。地元では、女神(おんながみ)さまといわれ、安産の神様としても信仰されている。	対馬市
7	しみずやまじょうあと 清水山城跡	国史跡	豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に築かせたとされる駅城で、一の丸から三の丸まであり、遺構もよく残っている。	対馬市
8	かねいしじょうあと 金石城跡	国史跡	対馬藩宗家の居城跡とその庭園。ここで朝鮮通信使一行を出迎えたといわれている。	対馬市
9	きゅうかねいしじょううていえん 旧金石城庭園	国名勝		

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
10	ちょうせんこくしんしえまき 朝鮮国信使絵巻	県有形	朝鮮通信使の行列の様子を色彩豊かに描いており、当時の姿を彷彿とさせる。	対馬市
11	つしまはん ふなえあと 対馬藩お船江跡	県史跡	対馬藩の藩船を格納、係留したドック跡。朝鮮貿易を担う対馬藩にとって、船は重要な交通手段であり、ここから釜山など各方面へと航海に出た。	対馬市
12	佐須奈港 (佐須奈日向改番所跡)	未指定	朝鮮往還の玄関口として古代より栄えた良港で、朝鮮通信使上陸の地である。江戸時代には対馬藩主宗義真により日向と陰の2カ所の改番所が設置され、密航者や密貿易の取り締まりが行われた。日向番所は石垣や井戸が現在でも残存し、当時をしのばせる。また、この地より「孝行芋」(サツマイモ)が朝鮮半島に伝わったともいわれている。	対馬市
13	鰐浦 (朝鮮通信使寄港地、 ヒトツバタゴ自生地)	未指定 (ヒトツバタゴ自生地 は国天然記念物)	古くより朝鮮半島との通交貿易の窓口となった朝鮮通信使上陸地の一つ。港の西側には朝鮮通信使の停泊地といわれる矢櫃があり、現在でもその石積を見ることができる。 古代より大陸への窓口であった対馬を象徴する大陸系植物、ヒトツバタゴ自生地でもある。	対馬市

《 壱岐市 》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	はる つじい せ き 原の辻遺跡	国特別史跡	弥生時代の環濠集落跡で、『魏志倭人伝』に記された一支国の王都。弥生時代、海外交易の拠点として大いに栄えた。	壱岐市
2	ながさきけんはる つじい せ き しゅつどひん 長崎県原の辻遺跡出土品	国重文	朝鮮半島系土器など交流・交易を物語る遺物が多く出土している。	壱岐市
3	い き こふんぐん 壱岐古墳群	国史跡	6 世紀後半から 7 世紀前半に築造された古墳群。首長クラスの古墳の石室からは、大陸や朝鮮半島の国々から認められていたことを物語る多くの遺物が発見されており、それらの国々と精通した有力者の存在がわかる。	壱岐市
4	ながさきけんささづかこ ふん しゅつどひん 長崎県笹塚古墳出土品	国重文	亀形飾金具・杏葉・雲珠などの金銅製の馬具類が出土しており、朝鮮半島系の外来土器、鳳凰を表現した環頭大刀柄頭は韓国の古墳からも同形の柄頭が出土されるなど、交易・交流が活発であったことを物語っている。	壱岐市
5	ながさきけんそうろくこ ふん しゅつどひん 長崎県双六古墳出土品	国重文		壱岐市
6	かつもとじょうあと 勝本城跡	国史跡	豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に築かせたとされる駅城。本丸を取り囲む石垣と、本丸への出入り口部分が残っており、天気がいい日には、彼方の対馬を望むことができる。	壱岐市
7	うちめわん 内海湾	未指定	一支国と大陸を行き交う古代船が湾に停泊し、小舟に乗り換えて人や物を原の辻へ運んでいた。内海湾に浮かぶ小島は、現在、神が宿る島と呼ばれている。	壱岐市
8	たけ つじ 岳ノ辻	未指定	壱岐の最高峰(212.8m)で、島全体の 3/4 を見渡すことができ、古代から防衛の拠点で、烽火台があったといわれている。	壱岐市
9	カラカミ遺跡 いせき	市史跡	弥生時代の環濠集落跡。交易を通じて鉄製品や鉄素材等を入手し、国内各地に鉄製品を供給する中継基地で、弥生時代を代表する鉄器生産の鍛冶工房でもあったこの地は、東アジア交易で重要な役割を果たしていた。	壱岐市

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
10	なまいけじょうあと 生池城跡	市史跡	16 世紀中頃松浦党の源壱(みなもとのいち)が築いた山城。朝鮮や中国沿岸で私貿易を行った倭寇の一人であったが、後に朝鮮から貿易許可書である図書を受け、正式に貿易を行った。	壱岐市

《五島市》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	三井楽 (みみらくのしま)	国名勝	五島市三井楽町の海岸域及び海域。日本最西端である五島は、遣唐使船の最終寄港地であるとともに、「亡き人に逢える島」「異国との境界にある島」ともいわれている。	五島市
2	みょうじょういんほんどう 明星院本堂	県有形	五島で最も古い寺といわれ、空海が唐から帰朝する途中でこの寺に籠り、明星院と名付けたといわれている。	五島市
3	ともづな石	市史跡	五島市岐宿町の白石湾は、古来遣唐使船が最後に停泊した港であり、遣唐使船を繋いだという「ともづな石」が安置・祀られている。	五島市

《新上五島町》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	ひのしま せきとうぐん 日島の石塔群	県史跡	40 基以上の墓碑・墓石がある中世古墳群。大陸との交易品を若狭湾に運び、帰りの船にバラストとして日引石の石塔を持ち帰ったともいわれ、海上交易の拠点だったと考えられている。	新上五島町
2	けんとうししせき 遣唐使史跡 ひめじんじゃあと いし (姫神社跡、ともじり石、 ひめじんじゃ きんぼぜ 姫神社、錦帆瀬、 みかのうら みふねさま 三日ノ浦、御船様)	未指定 (御船様は町指定)	新上五島町には、遣唐使が風待ちをした場所や、航海安全を祈願した神社等が点在し、大陸との交流の足跡がみられる。	新上五島町

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
3	最澄ゆかりの山王信仰 <small>さんのうさん あおかたじんじゃ</small> (山王山、青方神社)	未指定	山王山は、最澄が遣唐使の航海安全を祈願し、無事帰国後、山王神を勧進し開いたといわれ、中腹にある二ノ宮の岩窟内には中世以降、鏡が奉納され、その中には宋代の船載鏡があり、大陸との交流の足跡がみられる。 青方神社は古名を山王宮と称し、山王山の遥拝所であったといわれている。	新上五島町

- (1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。
- (2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。
- (3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。
- (4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

対馬市

(1) 金田城跡



(4) 対馬藩宗家墓所



(2) 対馬の亀ト習俗



(5) 万松院の三具足



(3) 豆酲の赤米行事



(6) 銅造如来坐像 (黒瀬観音堂)



(7) 清水山城跡



(11) 対馬藩お船江跡



(8) 金石城跡



(12) 佐須奈港 (佐須奈日向改番所跡)



(9) 旧金石城庭園



(13) 鰐浦 (朝鮮通信使寄港地、ヒトツバタゴ自生地)



(10) 朝鮮国信使絵巻



壱岐市

(1) 原の辻遺跡



(2) 長崎県原の辻遺跡出土品



(3) 壱岐古墳群



(4) 長崎県笹塚古墳出土品



(5) 長崎県双六古墳出土品



(6) 勝本城跡



(7)内海湾



(10)生池城跡



(8)岳ノ辻



(9)カラカミ遺跡



五島市

(1) 三井楽(みみらくのしま)



(2) 明星院本堂



(3) ともづな石



新上五島町

(1) 日島の石塔群



(2) 遣唐使史跡

(2)-1 姫神社跡



(2)-2 ともじり石



(2)-3 姫神社



(3) 最澄ゆかりの山王信仰

(3)-1 山王山



(2)-4・5 錦帆瀬、三日ノ浦



(3)-2 青方神社



(2)-6 御船様



市町村の位置図（地図等）



※国土地理院の電子地形図に市町名等を追記して掲載

【対馬市】

韓国・釜山から 49.5km に位置し、南北 82km、東西 18km の細長い島。島の 89% が山林で、中央部にリアス式海岸の浅茅湾を有する。島内を国道 382 号が縦断し、長崎とは空路、壱岐とは海路、福岡とは空路と海路、釜山とも海路で結ばれている。

【壱岐市】

九州本土と対馬の間に位置し、南北 17km、東西 15km の丘陵性で平坦な壱岐島の周囲に、小離島が点在する。壱岐島内を国道 382 号が走り、長崎とは空路、対馬・福岡・佐賀とは海路で結ばれている。

【五島市】

長崎港から西へ約 100 km、五島列島の南西部、九州の最西端に位置し、福江島の周囲に 10 の有人島と 52 の無人島がある。複雑な海岸線を有する福江島内をほぼ一周するように、国道 384 号が走り、長崎・福岡とは空路と海路で結ばれている。

【新上五島町】

五島列島の北部に位置し、中通島・若松島を主な町域とし、その周辺に 5 の有人島と 60 の無人島がある。中通島と若松島間、中通島と頭ヶ島間は橋が整備され、中通島内の奈良尾港から有川港までを国道 384 号が縦断し、長崎・佐世保・福岡とは海路で結ばれている。

構成文化財の位置図（地図等）

【対馬市】





※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

【 壱岐市 】



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

【五島市・新上五島町】



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

(2) 遣唐使史跡 (3) 最澄ゆかりの山王信仰



※国土地理院の電子地形図に文化財名等を追記して掲載

ストーリー

日本は大小 6,852 の島から成り、長崎県には日本最多の 971 の島がある。朝鮮半島との間に飛び石のように浮かぶ壱岐と対馬、大陸との間の東シナ海に鎖状に浮かぶ五島列島は、いにしえより、日本と大陸を結ぶ「海の道」の要衝であり、大陸との交流のインターフェースでもあった。

とりわけ、朝鮮半島と指呼の間にある国境の島、壱岐と対馬は、その最前線であった。

邪馬台国へと続く「海の道」に浮かぶ国際交流の都

日本がまだ「倭」の国とよばれていた時代、中国の使節は、朝鮮半島から対馬、壱岐を經由して、倭の国の女王がいる邪馬台国を目指した。対馬、壱岐を旅した中国の使節の足跡を辿るとき、『魏志倭人伝』に記されたとおりの原風景が目の前に広がる。

中国の使節が訪れた「^{い き こ く}一支出国」の「原の辻」は、海上交易で王都を築いた国際交流都市の先駆けであった。倭の国のどこよりも早く海外の情報をキャッチできる原の辻には、日本人だけでなく、朝鮮半島から移り住んだ人もいて、活気に満ちあふれていた。

朝鮮半島系土器、ムンクの『叫び』のような人面石など多様な遺物が出土しているこの地は、まさに弥生時代のデパートであった。なかでも、きらきらと青色に輝く中国製トンボ玉は、女性や子どもたちの心を捉えたに違いない。

県内有数の穀倉地帯でもある遺跡の周辺は、古代米が栽培されており、復元された遺跡と青田や稲穂が広がる眺めは、訪れた人を弥生時代へタイムスリップさせてくれる。



原の辻遺跡

朝鮮半島との関係に左右される日本最果ての島

最先端の文化の導入と交流が行われる一方、国境の島は異国へとつながる海の道の最終中継地、国防の最前線としての顔を持つ。

壱岐は、大和政権が朝鮮半島へ進出する際の^{へいたん}兵站基地としての役割を担っていた。壱岐古墳群は、当時としては日本有数の墳丘・石室の規模を誇っており、ひんやりと涼しい石室の中に身を置くと、古墳に眠った人物の権勢が静かに伝わってくる。

663 年、白村江の戦い以降、日本と新羅との外交関係が悪化すると、遣唐使は、壱岐、対馬を経て中国に渡るルートから、五島列島を経て東シナ海を渡る危険なルートをとらざるをえなくなった。

当時の船の構造、航海技術では、ほとんど無事には帰ってこられなかった時代、万葉の都人にとって五島は、日本の最果ての地であり、亡くなった人に会える「みみらくのしま」と称された。

千年以上も昔と変わらぬ東シナ海的大海原を目の前にすると、この地を最後に異国へと旅だった人々と送り出す家族の覚悟や想い、空海の「辞本涯」(本涯 = 日本の果て)の言葉が、時代を超えてこだまする。



金田城跡の山頂から国境の海を望む

一方、壱岐と対馬でも、白村江の戦い後、国防のために^{さきもり}防人と^{とび}烽火が置かれ、対馬には亡命百濟

人の技術による朝鮮式の山城「金田城」^{かねだじょう}も築かれた。

複雑に入り込んだ海岸に囲まれた浅芽湾^{あそつわん}と天然の絶壁を利用して築かれた金田城跡に立ち、国境の海を見下ろすと、はるか東国から送られてきた防人たちの望郷の念に胸がつまる。

国交断絶から復活へ ～朝鮮通信使がつないだ日朝交流の架け橋～



朝鮮通信使行列の再現

室町時代の対馬は、島主・宗氏^{もうちう}を中心に日本と朝鮮との間で外交の実務と貿易を独占してきたが、豊臣秀吉の朝鮮出兵により一変し、国交は断絶した。

長年、朝鮮との貿易に島の経済を頼ってきた対馬にとって、朝鮮との国交回復、貿易復活は死活問題であった。

対馬藩は、朝鮮との国交回復交渉を行い、その間、日朝双方の国書を偽造するなど危ない橋を渡りながら、ようやく江戸時代最初の朝鮮通信使来日に成功する。

その後、朝鮮貿易の復活も果たし、対馬藩の繁栄^{はんしやういん}ぶりは万松院に古色蒼然と並ぶ歴代対馬藩主墓所の中でも、ひときわ目を引く当時の藩主の墓所の巨大さからも偲ばれる。

以来、約 200 年に渡り、合計 12 回の日朝修好の象徴である朝鮮通信使の来日が続いた。

朝鮮通信使を丁重に出迎えるため、立派な庭園を持つ金石城^{かねいし}を整備した対馬藩。異国の華やかな衣装をまとった行列は、遠方からも見に来る人も多く、沿道に並ぶ人々を魅了した。

隣国同士が 200 年以上の長きに渡り、平和的関係を築いたことは世界史的にみても稀有なことがある。時に反目し合うこともあったが、日朝関係の根底には「誠信の交わり」があった。

享保の通信使の江戸往復道中、対馬藩の儒者・雨森芳洲^{あめのもりほうしゅう}と通信使の製述官・申維翰^{しんいかん}は互いの主張を譲らず衝突してきたが、旅の終わりには涙を流して別れを惜しんだ。

「互いに欺かず、争わず、真実をもって交わる」の精神は、今日の国際交流にも通じる。

時代とともに、壱岐と対馬の中継地としての役割は希薄になっていったが、島の特産品や民俗行事には、交流の痕跡が残っている。

壱岐の特産品「壱岐焼酎」は、大陸から伝わったとされる蒸留法を取り入れ、今では世界に誇れる産地ブランドとなっており、対馬の「対州そば」は大陸から伝わったそばの原種に近い。

また、稲作伝来の地といわれている対馬の豆酏^{づつ}地区は、宮中祭祀「新嘗祭」^{にいなめさい}にも奉納したことがある古代米の一種、赤米を神田で栽培し、その赤米を御神体とする神事が行われており、亀の甲を焼いて吉凶をみる古代の占い「亀卜」^{きぼく}もこの地区で受け継がれている。

民間では、朝鮮通信使行列の再現をはじめ、音楽祭、国境マラソンなど様々な日韓交流イベントが行われている。対馬高校ではハングルや韓国文化を学ぶコースが設置され、壱岐高校においても、原の辻遺跡を学び、中国語・中国文化を学ぶコースがあり、未来の日本を担う高校生が国際交流の基礎を習得している。

国境の島であるために融和と衝突の最前線の歴史を刻んできたが、今もなお連綿と交流が続くこれらの島は、国と国、民と民の深い絆が感じられる稀有な地域である。

ストーリーの構成文化財一覧表

《対馬市》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	かねだじょうあと 金田城跡	国特別史跡	唐や新羅の日本進攻を防ぐ目的で築かれた朝鮮式山城跡。山深い城山の頂からは、1300 年以上前に防人が見つめていた国境の海が一望できる。	対馬市
2	つしま きぼくしゅうぞく 対馬の亀卜習俗	国選択 無形民俗	亀の甲を焼き、ひび割れで年の吉凶を占う。大陸から朝鮮半島を経て伝わったといわれ、古くは壱岐や伊豆でも行われていたが、今では対馬のみで傳承されている。現在、亀卜は旧暦 1 月 3 日のサンゾーロー祭(市無形)で行われている。	対馬市
3	つ つ あかごめぎょうじ 豆酥の赤米行事	国選択 無形民俗	豆酥地区は、大陸から稲作が伝わった地といわれており、古くから、赤米を祀り、栽培する行事が行われている。	対馬市
4	つしまはんしゅうそうけぼしよ 対馬藩主宗家墓所	国史跡	江戸時代、朝鮮半島との外交・貿易の実務を担った対馬藩宗家の菩提寺「万松院」として市民に親しまれ、百雁木(ひゃくがんぎ)と呼ばれる 132 段の石段や杉が立ち並び、壮大な墓地と墓石が、朝鮮貿易の興隆を反映している。	対馬市
5	ばんしょういん みつぐそく 万松院の三具足	市有形	朝鮮との緊密さがわかる朝鮮国から贈られた青銅製の祭礼用三具足(香炉、燭台、花瓶)で、万松院の本堂にある。	対馬市
6	どうぞうによらいざぞう 銅造如来坐像 くろせかんのんどう (黒瀬観音堂)	国重文	統一新羅時代(8 世紀)のもので、朝鮮半島経由で伝わったとされる。地元では、女神(おんながみ)さまといわれ、安産の神様としても信仰されている。	対馬市
7	しみずやまじょうあと 清水山城跡	国史跡	豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に築かせたとされる駅城で、一の丸から三の丸まであり、遺構もよく残っている。	対馬市
8	かねいしじょうあと 金石城跡	国史跡	対馬藩宗家の居城跡とその庭園。ここで朝鮮通信使一行を出迎えたといわれている。	対馬市
9	きゅうかねいしじょううていえん 旧金石城庭園	国名勝		

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
10	ちょうせんこくしんしえまき 朝鮮国信使絵巻	県有形	朝鮮通信使の行列の様子を色彩豊かに描いており、当時の姿を彷彿とさせる。	対馬市
11	つしまはん ふなえあと 対馬藩お船江跡	県史跡	対馬藩の藩船を格納、係留したドック跡。朝鮮貿易を担う対馬藩にとって、船は重要な交通手段であり、ここから釜山など各方面へと航海に出た。	対馬市
12	佐須奈港 (佐須奈日向改番所跡)	未指定	朝鮮往還の玄関口として古代より栄えた良港で、朝鮮通信使上陸の地である。江戸時代には対馬藩主宗義真により日向と陰の2カ所の改番所が設置され、密航者や密貿易の取り締まりが行われた。日向番所は石垣や井戸が現在でも残存し、当時をしのばせる。また、この地より「孝行芋」(サツマイモ)が朝鮮半島に伝わったともいわれている。	対馬市
13	鰐浦 (朝鮮通信使寄港地、 ヒトツバタゴ自生地)	未指定 (ヒトツバタゴ自生地 は国天然記念物)	古くより朝鮮半島との通交貿易の窓口となった朝鮮通信使上陸地の一つ。港の西側には朝鮮通信使の停泊地といわれる矢櫃があり、現在でもその石積を見ることができる。 古代より大陸への窓口であった対馬を象徴する大陸系植物、ヒトツバタゴ自生地でもある。	対馬市

《壱岐市》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	はる つじい せ き 原の辻遺跡	国特別史跡	弥生時代の環濠集落跡で、『魏志倭人伝』に記された一支国の王都。弥生時代、海外交易の拠点として大いに栄えた。	壱岐市
2	ながさきけんはる つじい せ き しゅつどひん 長崎県原の辻遺跡出土品	国重文	朝鮮半島系土器など交流・交易を物語る遺物が多く出土している。	壱岐市
3	い き こふんぐん 壱岐古墳群	国史跡	6世紀後半から7世紀前半に築造された古墳群。首長クラスの古墳の石室からは、大陸や朝鮮半島の国々から認められていたことを物語る多くの遺物が発見されており、それらの国々と精通した有力者の存在がわかる。	壱岐市
4	ながさきけんささづかこ ふん しゅつどひん 長崎県笹塚古墳出土品	国重文	亀形飾金具・杏葉・雲珠などの金銅製の馬具類が出土しており、朝鮮半島系の外来土器、鳳凰を表現した環頭大刀柄頭は韓国の古墳からも同形の柄頭が出土されるなど、交易・交流が活発であったことを物語っている。	壱岐市
5	ながさきけんそうろくこ ふん しゅつどひん 長崎県双六古墳出土品	国重文		壱岐市
6	かつもとじょうあと 勝本城跡	国史跡	豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に築かせたとされる駅城。本丸を取り囲む石垣と、本丸への出入り口部分が残っており、天気がいい日には、彼方の対馬を望むことができる。	壱岐市
7	うちめわん 内海湾	未指定	一支国と大陸を行き交う古代船が湾に停泊し、小舟に乗り換えて人や物を原の辻へ運んでいた。内海湾に浮かぶ小島は、現在、神が宿る島と呼ばれている。	壱岐市
8	たけ つじ 岳ノ辻	未指定	壱岐の最高峰(212.8m)で、島全体の3/4を見渡すことができ、古代から防衛の拠点で、烽火台があったといわれている。	壱岐市
9	いせき カラカミ遺跡	市史跡	弥生時代の環濠集落跡。交易を通じて鉄製品や鉄素材等を入手し、国内各地に鉄製品を供給する中継基地で、弥生時代を代表する鉄器生産の鍛冶工房でもあったこの地は、東アジア交易で重要な役割を果たしていた。	壱岐市

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
10	なまいけじょうあと 生池城跡	市史跡	16 世紀中頃松浦党の源壱(みなもとのいち)が築いた山城。朝鮮や中国沿岸で私貿易を行った倭寇の一人であったが、後に朝鮮から貿易許可書である図書を受け、正式に貿易を行った。	壱岐市

《五島市》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	三井楽 (みみらくのしま)	国名勝	五島市三井楽町の海岸域及び海域。日本最西端である五島は、遣唐使船の最終寄港地であるとともに、「亡き人に逢える島」「異国との境界にある島」ともいわれている。	五島市
2	みょうじょういんほんどう 明星院本堂	県有形	五島で最も古い寺といわれ、空海が唐から帰朝する途中でこの寺に籠り、明星院と名付けたといわれている。	五島市
3	ともづな石	市史跡	五島市岐宿町の白石湾は、古来遣唐使船が最後に停泊した港であり、遣唐使船を繋いだという「ともづな石」が安置・祀られている。	五島市

《新上五島町》

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
1	ひのしま せきとうぐん 日島の石塔群	県史跡	40 基以上の墓碑・墓石がある中世古墳群。大陸との交易品を若狭湾に運び、帰りの船にバラストとして日引石の石塔を持ち帰ったともいわれ、海上交易の拠点だったと考えられている。	新上五島町
2	けんとうししせき 遣唐使史跡 ひめじんじゃあと いし (姫神社跡、ともじり石、 ひめじんじゃ きんぼぜ 姫神社、錦帆瀬、 みかのうら みふねさま 三日ノ浦、御船様)	未指定 (御船様は町指定)	新上五島町には、遣唐使が風待ちをした場所や、航海安全を祈願した神社等が点在し、大陸との交流の足跡がみられる。	新上五島町

番号	文化財の名称 (1)	指定等の状況 (2)	ストーリーの中の位置づけ (3)	文化財の所在地 (4)
3	最澄ゆかりの山王信仰 <small>さんのうさん あおかたじんじゃ</small> (山王山、青方神社)	未指定	山王山は、最澄が遣唐使の航海安全を祈願し、無事帰国後、山王神を勧進し開いたといわれ、中腹にある二ノ宮の岩窟内には中世以降、鏡が奉納され、その中には宋代の船載鏡があり、大陸との交流の足跡がみられる。 青方神社は古名を山王宮と称し、山王山の遥拝所であったといわれている。	新上五島町

- (1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。
- (2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。
- (3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。
- (4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

対馬市

(1) 金田城跡



(4) 対馬藩宗家墓所



(2) 対馬の亀ト習俗



(5) 万松院の三具足



(3) 豆酲の赤米行事



(6) 銅造如来坐像 (黒瀬観音堂)



(7) 清水山城跡



(11) 対馬藩お船江跡



(8) 金石城跡



(12) 佐須奈港 (佐須奈日向改番所跡)



(9) 旧金石城庭園



(13) 鰐浦 (朝鮮通信使寄港地、ヒトツバタゴ自生地)



(10) 朝鮮国信使絵巻



壱岐市

(1) 原の辻遺跡



(4) 長崎県笹塚古墳出土品



(2) 長崎県原の辻遺跡出土品



(5) 長崎県双六古墳出土品



(3) 壱岐古墳群



(6) 勝本城跡



(7)内海湾



(10)生池城跡



(8)岳ノ辻



(9)カラカミ遺跡



五島市

(1) 三井楽(みみらくのしま)



(2) 明星院本堂



(3) ともづな石



新上五島町

(1) 日島の石塔群



(2) 遣唐使史跡

(2)-1 姫神社跡



(2)-2 ともじり石



(2)-3 姫神社



(3) 最澄ゆかりの山王信仰

(3)-1 山王山



(2)-4・5 錦帆瀬、三日ノ浦



(3)-2 青方神社



(2)-6 御船様

